

2020年8月23日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「主は、山を下りて」マタイ福音書8章5～17節

主任牧師 加藤 誠

「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。『彼はわたしたちの患いを受け、わたしたちの病を担った。』(マタイによる福音書8章17節)

「時をよく用いなさい」(エフェソ 6・16) という御言葉があります。さまざまな苦難に囲まれた時に「私たちは何に目を注いで歩むのか」を問うている言葉です。目の前に立ちふさがり苦難や悪だけを見るなら、私たちは不安や失望に押しつぶされて下を向くしかありません。しかしイエス・キリストは暗闇の中に私たちを照らす光として来てくださいました。この主イエスに目を注いでいく時に新しい生き方、可能性、希望が示されていきます。それゆえに「時をよく用いなさい」の御言葉の前には、こんな言葉が語られているのです。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」(同 6・8)。私たちだけを見るなら、そこには暗闇が広がっています。しかしイエス・キリストという光に照らされて歩む時、私たちは暗闇の中であって光の子として、光の道を歩む者とされるのです。さて、私たちは主イエスの光に照らされながら「今の時をどのようによく用いる」ことができるのでしょうか。

新型コロナ・ウィルスのために、主日礼拝をはじめとして教会の従来のプログラムがほとんど成り立たない状態が続いている中で、「このようなきだからこそ、止めずに続けたい」と続けられている公園クラスの働きがあります。毎週日曜日の午後三時に滝王寺公園に出かけるのです。一昨日の科長会でこんな報告を聞きました。「今年の四月以降、どんな時にも公園に来て、聖書のお話を待っていて子どもたちがいる。『メッセージの奉仕をさせてください!』と手を挙げて加わってくださる方が与えられている。R君は、この前の土砂降りの時も待っていて、シートを引きづりながら、軒下で公園クラスをした」と。イエス・キリストという光に照らされて起こされて続けている大切な働きです。小さな働きですが、しかし大井教会がなぜこの地に建てられているのかを指し示している大切な働きではないでしょうか。この小さな働きに大井教会の存在意義が詰まっている。公園クラスのうれしい報告を聞きながら、「時をよく用いなさい」という御言葉が強く迫ってきました。さて、私たちは「今の時をどのように『よく』用いる」のでしょうか。「このようなきだからこそ、新たに始めてみたい」という試み、チャレンジが生まれています。「時をよく用いなさい」という言葉に励まされて、しなやかに、したたかに、楽しく! 何よりも、主イエスの福音(喜びの知らせ)をいただいているうれしさ!…を分かち合っていきたいと思うのです。

さて、新礼拝堂建築の工事がいよいよ始まっていく時に、あらためて「礼拝」あ

るいは「教会」というテーマで、聖書に聴いていきたいと思います。今朝はマタイ福音書8章を選ばせていただきましたが、ここには「山を下りて、人々の暮らしの中に入って行く主イエス」が描かれています。マタイ福音書の「山」は、「山上の説教」が語られたように静かに神の語りかけに心を集中させる場所ですが、主イエスはいつまでもそこにとどまってはいません。「山を下りて」人々の暮らしの中に、つまりさまざまな苦悩や悲しみ、痛みの中に赴くのです。

この8章で、主イエスはどのような人たちと出会っているか。まず「重い皮膚病の人」であり、「ローマの百人隊長」、「漁師ペトロのしゅうとめ」であり、そして「ガリラヤ湖の向こう岸の墓で暮らしているガダラ人（異教徒）」です。ペトロのしゅうとめ以外は、明らかに当時のユダヤ教では、毎週の安息日に村々の会堂でささげられている礼拝から除外されていた人たち、つまり「お前たちのような者が来るころではない！」と、会堂への出入りを禁じられていた人たちです。ペトロのしゅうとめも「熱を出して寝込んでいた」とありますから、自力では礼拝に参加できない状態にありました。その彼・彼女たちのもとに主イエスの方から出向いていかれるのです。何のためにでしょうか。それは、彼・彼女たち一人ひとりに確かに注がれている神の愛の「幸い」を届けるためです。「山上の説教」の冒頭で主イエスが語られた「幸い宣言」（マタイ5・3～12…「わたしもあなたと共に生きる！」という主イエスの宣言）を届けるためです。「あなたも一緒に、その神の幸いを受け取って神を礼拝しながら生きていこう！」という神の招待状を届けるためです。その「幸い」は、人々が語り、もてはやす「幸い」とは異なるものです。どうやったらお金がもうかり、うまくやれるかを説いた「幸い」でもなく、人と人の間に敵と味方をつくりだす境界線を引いて、自分たちだけの勝利を目指す「幸い」ではありません。使徒パウロの言葉を借りるなら、貧しい時にも豊かな時にも、満腹の時にも空腹の時にも、物が有り余っている時にも不足している時にも、いついかなる場合にも対処することのできる「幸い」（フィリピ4・12～13）であり、自分を賢い者とうぬぼれることなく、いま「敵」に見える人にも祝福を祈り、苦難の中にも希望を見出して、「すべての人と平和に暮らす道」を祈り求めていく「幸い」です（ローマ12・12以下）。

この主イエスが届けてくださった「幸い」は、私たちがいつも立ち帰るべき「原点」であり、新しい一週間の「出発点」です。私たちは日々つい目先のことに心を奪われて、いつのまにか「原点」「出発点」を見失ってしまっていないでしょうか。最初の段階で目指すべき方向がずれてしまうと、歩むにつれてそのずれがどんどんと大きくなってしまいうように、私たちは毎日、毎週、繰り返す、神の「幸い」を受け取る「原点」「出発点」に立ち戻る必要があるのです。暗闇の中で右往左往している私たちに、その「幸い」を届けるために来て下さった主イエスのまなざしと言葉を、今日も受けて新しい週を歩み始めていきましょう。